芸術と科学の蜜月を再び

石原あえか×中村桂子

生命誌研究館展示「蟲愛づる姫君」の前で

石原あえか（いしはら・あえか）

東京生まれ。ドイツ・ケルン大学博士（PhD）。慶應義塾大学商学部教授を経て、2012年より東京大学大学院総合文化研究科准教授。ヤーコプ・ヴィルヘルム・グリム奨励賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞など、また2013年にドイツ政府よりジーボルト賞受賞。ドイツ語著作・論文と並行して、日本語著書に『科学する詩人　ゲーテ』（サントリー学芸賞）および『ドクトルたちの奮闘記』がある。

科学という言葉では表現できない学問を

中村　石原さんの『科学する詩人 ゲーテ』[註1]をとても楽しく拝読して、以前からお話する機会を楽しみにしてきました。

研究館の初代館長の岡田節人先生[註2]がゲーテが大好きで、動物の発生のお話をなさる時、同じ細胞仲間が集まるところで「親和力」という言葉を使っていらっしゃいました。旧制高校世代の岡田先生の中には、ゲーテ

註1：『科学する詩人 ゲーテ』石原あえか著。慶應義塾大学出版会（2010年）。

註2：岡田節人［おかだ・ときんど］1927年生まれ。発生生物学者。生命誌研究館名誉顧問。2007年文化勲章受章。
関連記事：生命誌ジャーナル30号「ルイセンコの時代があった－生物学のイデオロギーの時代に」